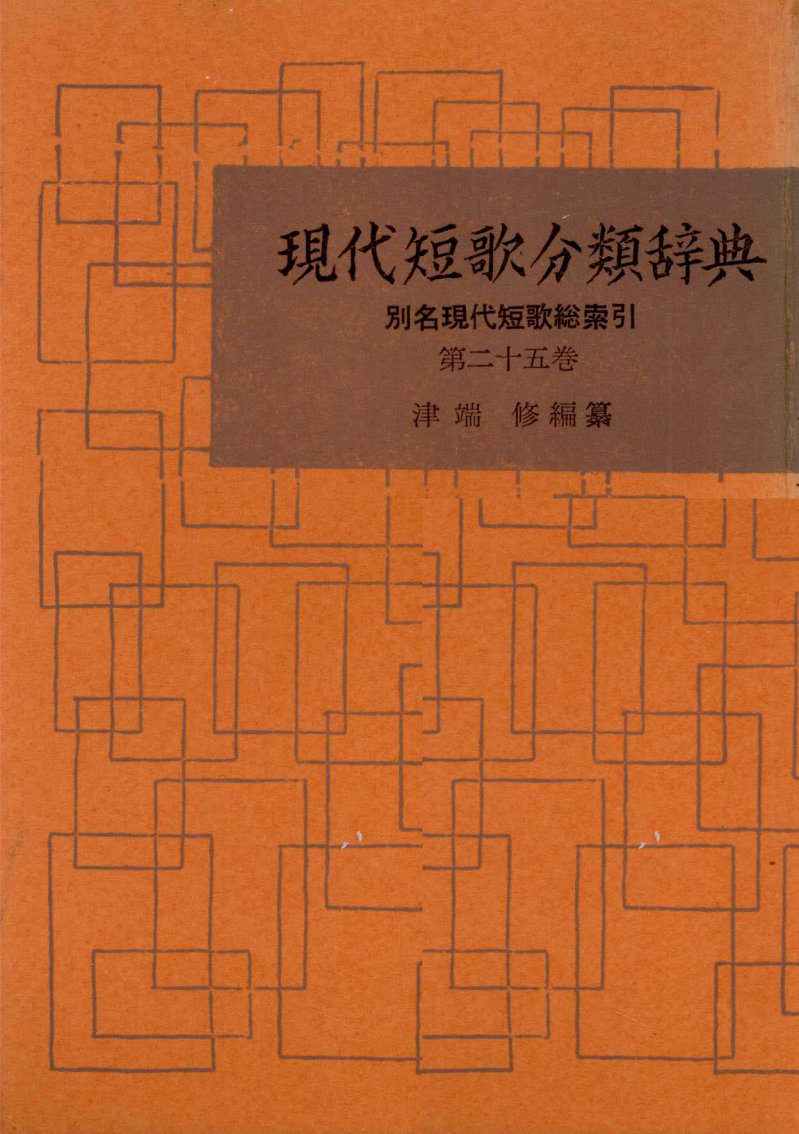


The background of the entire cover is a repeating pattern of overlapping squares, creating a complex, geometric, and somewhat maze-like visual effect. The squares are drawn with thin lines and are arranged in a way that they interlock and overlap, covering the entire surface of the book.

現代短歌分類辭典

別名現代短歌總索引

第二十五卷

津端修編纂

津端 修 編纂

現代短歌分類辭典

第二十五卷

現代短歌分類辞

25

限定版1,000部の内

昭和四十五年十二月十五日発行 定価五〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 修

発行所

東京都中野区上高田二丁目九の一六

津 端 修

振替 東京 六七三四一番
電話 三八七局八四二九番
郵便番号 一六四

凡 例

- 一、明治、大正、昭和三代に詠まれた主要な歌三十三万首を分類した。
- 一、分類の基準は単語を中心とし、単語には、ことごとく品詞名をつけた。
- 一、単語の排列は、五十音順に従った。
- 一、序文集は第十二巻にある。
- 一、歌は原作の仮名遣いにしたが、初版本に拠る方針をとった。
- 一、歌の下にある記号は歌集名の略符号である。
- 一、単語の説明は、新仮名遣いに従った。

目

次

淡々とーして	一七	歌数	一	頁数	阿波鉾山	一七	歌数	一	頁数	六
淡い	七		二		栗稈	六		二		七
安房磯	一		三		栗殻なか	一		一		七
阿呆	四		〃		栗稈畠	一		一		〃
会はーう	二		〃		淡かりーし	二		一		八
淡う	二		四		淡かる	一		一		〃
阿呆鳥	一		〃		あばかる	一		二		〃
信天翁（あはうどり）	二		〃		あばかるる	二		四		九
阿房の宮	一		五		あばかれーて	四		〃		〃
阿呆らし	一		〃		淡き	〃〃〃		二		三
阿呆らしい	一		〃		あはぎ	二		一		〃
阿呆らしかつーたーぞ	一		〃		あばき	一		一		〃
阿波大浦回	一		〃		あばきーいきまく	一		一		〃
安房が崎	二		六		あばきー掠めーけむ	一		一		〃
アバカテ青葉	一		〃		あばきーさらさーる	一		一		〃

逢は—ず①(終止形)
 同 ②(連用形)
 逢は—ず—し
 逢は—ず—して
 会は—ず—て
 逢は—ず—ば
 合は—ず—らし
 あは—ず—らむ
 合する
 裕
 合せ
 あはせ容る—べき
 合はせ—え—ず
 あはせかがみ
 裕着
 合せき—たり—て
 合せ来—つ

一 一 一 一 一 一 五 四 三 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

ハ 逢はせ下され
 七 合せ—けり
 六 合せ—ける
 六 合せ—し
 六 合せ—た
 〃 あはせ—たい
 〃 合せ立つ
 〃 合せ—たり
 六 合せたる
 〃 合せ—つ
 七 合せ—つ
 一三 合せ—つる
 〃 合せ—て
 一三 あはせ—ても
 〃 合せ—ども
 〃 合はせ—て—は
 〃 あはせ—て—む

二 一 一 一 一 五 二 一 二 二 二 一 四 四 一 三 五 一

〃 〃 〃 〃 一三 一八 一七 〃 〃 一六 〃 〃 一五 一五 〃 〃 一三 一三

あはせぬ (打消)
 同 (完了)
 あはせぬ
 裕羽織
 合せましけむ
 合はせます
 合せまつる
 合せむ
 合せやる
 合せゆく
 合せる (終止形)
 同 (連体形)
 合はせる
 合せぬ
 あはせる
 合せをり
 あはせる

一 二 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

栗田 (地名)	栗田	あばた	阿波大尽	栗田口	栗だつ (終止形)	同 (連体形)	あばたづら	あばた面 (あばたも)	栗田山	淡路	淡路が島	淡路御陵	淡路島	淡路島かけ	淡路島山	淡路ね
二三	二四	二四	二四	二四	二五	二五	二五	二五	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二七	二七

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

二七 二八 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九 二九

淡路の海
 淡路の島
 淡路の瀬戸
 淡路びと
 粟津
 淡つ海
 あは月
 粟づけ
 あはつけき
 淡つけく
 あはつけけれど
 あはつけ心
 あはつけ人
 粟津野
 粟粒
 粟津深田
 粟粒ほど

一 一 三 三 五 一 一 六 二 二 一 一 二 一 二 一〇 二

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 逢はーで
 アバート
 阿波門
 アバートらしき
 逢はーな
 あはーない
 逢はーなく
 逢はーなくに
 遇はーなむ
 逢はーなも
 逢はーなん
 あはに
 逢はーぬ
 逢はーね
 逢はーねど
 逢はーねども
 逢はーねば

一四 三 三 一 一〇 一 一 一 一 六 六 二 一 一 一 一四 六

〃 一五 〃 一五 一四 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

一	一三七	一	三	三	一	三	九	一	一	五二	一四	一二	六	咒	六	咒	二八〇
一九五	〃	二〇七	〃	〃	〃	〃	〃	二〇九	二一〇	〃	〃	二五五	二五六	二六五	二七四	二七八	

	あはれ	⑧	(四句切)	一五	二八四
同	同	⑨	(四句中間切)	二五	二九六
同	⑩	(結句止)		二七	三九
合	計			三・五五	

あはあはと——して②【副詞・助詞】「淡々として」

平安もあはあはとして擬宝珠のうす紫の花も散りゆく③

誇ろひて何すやと人を思ひしも思はぬ日ありあはあはとして④

窓たかく桃咲きぬれば悔しみの淡々として今日は居りけり

真日の下鳥海に雲の湧くが見ゆ淡々として多くのぼらず

み仏に供へしあかき銭のうへあはあはとして塵の浮くあり

山の間に背面^{そむち}を見する妙義の山あはあはとして暮れてゆくべし⑤

山深くひとり住めればわが欲も淡々として昼も眠りぬ

悠紀の歌淡々として響きいづる御幕の中の午後の静けさ⑥

夕顔はみどり明るき夕かげにあはあはとして花咲きにけり

読みかへせば淡々として奇もなければど読めば心が明るくなりて①

わが父の十三回忌をはるころ淡々として著物をかさぬ⑬

淡々と——して

久方寿満子

谷 鼎

小暮政次

土屋文明

生方たつゑ

半田良平

市川 享

尾上柴舟

須藤泰一郎

竹添履信

斎藤茂吉

淡々と―して

わが身より消えうせゆきし性慾が淡々としてときになつかし

西田 嵐翠

吾がめぐり麦うるる香に入りがたの光は既に淡あはとして

小暮 政次

沸きたぎる白湯さゆに蜂蜜を溶きて飲むこの宵々のあはあはとして①

田中 四郎

海わたなかの巖に群るる鶴のとりにもる冬日のあはあはとして

木俣 修

渡り鳥のこゑの聞ゆる昼つ方淡々としてわれはありける⑤

半田 良平

遣伝実験の路の臺あまた萌えいでぬ湿れる土に淡々として①

岩田 吉人

あはい【形容詞】「淡い」

口語形容詞の連体形

幾条か淡いけむりの尾をひいて芝浦の沖に浮く船がある

幹 脩太

きのふ四本けさは三本もぎました朝つゆのなかのあはい胡瓜を

花岡 謙二

すがれ木にのこる柿の実あかかとこれはさみしい淡い日をうけ④

西村 陽吉

南西の空に淡い六日月妻もみてゐよかこの六日月

花岡 謙二

寐はぐれた鹿がとぼとぼおりてくる石段にある淡い陽のいろ②

清水 信

夜ふくれば、俯向きかげんとなるお前の、胸をよぎる淡い影もあらう① 葉山耕三郎

私の心に淡い灼熱感を与へて、すかんぼの花に五月の日が落ちる、ふるさと！ ⑨

前田 夕暮

あはいそ【名詞】〔安房磯〕

鹿野山を背がひにも見ず安房磯にけなめてをらむ吾しかなしも①

蕨 真

あはう【名詞】〔阿呆〕

声あげて阿呆のごとく笑ひたり声はさびしくこだましにけり

福田 夕咲

こんなところに手がついてゐる。阿呆な手のもつてゆきどころがない④

米田 雄郎

春の昼、病んで思ひはむなしく、うつうつと寝て阿呆になれる④

米田 雄郎

笑はれてよいざまをやつてのける。おのれをことさら阿呆にする⑧

米田 雄郎

あは——う【動詞・助動詞】〔会はう〕

淡い

合はう

「う」は、活用語の未然形につく助動詞

いひたきことしつかりとこらへにこやかな顔向けて人に会はうとする⑦矢代東村
たとひ半殺しのうきめにあはうとも生白^{なましろ}いその腹は見せるな①前川佐美雄

あはう【形容詞】〔淡う〕

シク活用連体形「淡き」のウ音便

青梅はにほひぬ宮の古ばしら丹なるが淡う影うつすとき③若山牧水

紅葉の短冊の墨淡うして小木の夜酒も寒かりしかな⑭吉井勇

あはうがらす【名詞】〔阿呆鳥〕

愚かなり阿呆鳥の啼くよりもわがかなしみをひとに語るは③若山牧水

あはうどり【名詞】〔信天翁〕

あとさけび前へ倒れて息絶えし灯台守に信天翁なく①吉井勇
茫然と口に指あて黒船をながむるむれに信天翁なく①吉井勇